

学位論文要旨

## 実践共同体における読むことの学習評価に関する研究

広島大学大学院 人間社会科学研究科 博士課程後期  
教育科学専攻 教師教育デザイン学プログラム 国語文化教育学領域

木村 穂乃香

## 研究の目的と方法

本研究は、他者との関わりの中で読みを広げ深める自立的な読み手の育成のために、実践共同体の形成を軸とした読むことの学習評価方法を探究することを目的として設定した。

近年、構成主義の学習観に基づいた学習評価において、社会的文脈と結びついた協働学習の場で学習者が高次の思考をはたらかせている場面を捉えること、それをルーブリックに基づいた指標やポートフォリオから評価することが求められている。教師と学習者がともに学習者の学習状況を追究・解釈し、学習者が次の学習へと向かえるようにすることが求められている。しかし、こうした学習評価は、設定された学習目標やルーブリックなどに基づいた数値や指標による評価から抜け出し切れていないこと、そのために評価の対象が個人の能力に限られる点で、学習者の学習状況を追究・解釈する上で限界があることが課題である。そこで、協働学習で生まれた学習者と他者との社会的関係性に言及し学習集団として価値づけることのできる学習評価としての対話とフィードバックの可能性を切り開いていくことが必要である。

一方、近年の国語科読むことの学習評価研究において検討されている対話については、教師と学習者との一対一のやり取りといったミクロな視点での方法論が充実する一方で、教師側のマクロな視点からの支援が十分に検討されていない。この課題を克服するために、学習者の個としての読みを保障しながらも、個の読みを学習集団全体としての学びと結びつけ価値づけていく学習評価法を模索していくことが必要になると考える。なぜなら社会的行為としての読むことの学習においては、学習集団全体としての学びの蓄積と個々の学習者の読みは相互に影響を及ぼしあっているからである。

そこで、本研究では読むことの学習評価における上記の課題の解決に向けて、「実践共同体を単位とした評価」に着目した。読むことの学習における実践共同体は、教師による適切な指導と評価によって学習者がテキストを読むという営みについての関心や話題を共有し、相互交流し、実践を深めていく（＝十全的参加）ことで形成される。しかし、読みの相互作用の様相や、その読みの相互作用を成立させる共同体の形成については検討されている一方で、読みの相互作用による読み深まりが生じる共同体の形成に焦点を当て価値づける学習評価については検討されていない。また、数値や指標による学習評価でこの点を価値づけることは難しく、対話による学習評価が望ましいと考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、読むことの学習における実践共同体を「本や文章に関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能について持続的な相互交流を通じて深めていく（＝十全的参加）人々の集団」と考え、その実践共同体を単位とした評価の在り方を探ることを目的とした。その意義は、読むことの学習を個人の営みではなく集団の営みとして捉えていくことを促す学習評価を追究することによって、社会的行為としての読むことの学習の営みの充実を促すとともに、自らの読みと他者の読みを吟味し複数の読みを相対化しながら集団全体で読みを広げたり深めたりできる自立的な読み手の育成に寄与することにある。

本研究は以下の4つのリサーチ・クエスチョンを明らかにすることで、読むことの学習における実践共同体を単位とした評価の在り方を探ることができると考えた。

- ①読むことの学習において実践共同体を単位とした評価を行う意義は何か。
- ②読むことの学習における実践共同体の実態と構成要素は何か。
- ③読むことの学習における実践共同体を単位とした評価の方法として、教師と学習者は学習者の学習状況をどのように追究・解釈できるのか。
- ④そのような評価の方法が、学習者の読みや読む行為にどのような広がり・深まりをもたらすのか。

このリサーチ・クエスチョンを検討するにあたり、これまでの読むことの学習評価の成果と課題を整理し、実践共同体を単位とした評価に関する先行研究の理論的分析を行った。また、評価の意義と方法を実践的に裏付けるために、読むことの学習実践を分析した。

## 各章の概要

### 第1章 読むことの学習評価の成果と課題

第1章では、社会的行為としての読むことの学習を支援するための学習評価の成果と課題について整理を行い、学習評価の方法である対話とフィードバックに着目することの必要性を示した。

読むことの学習評価論では、読むことの学習における能力とは何か、そもそも読むことの学習において読む行為はどのように成立するかということが検討された。そしてそれは、読むことの学習を能力の獲得のみとして捉えるのではなく、教師が計画した指導から相対的に自立した、社会構成主義に基づく社会的で複雑な営みとして捉え促していくことの必要性を示した。そしてそのような複雑な営みを教師のみが評価主体となって一方的に捉えていくのではなく、学習者もまた評価主体として、教師との対話を通して自身の読みを複数の見方によって価値づけていくことの重要性が示された。そして、教師と学習者の対話を核とした「学習としての評価」の方法の検討を通して、学習者が評価における主体性とメタ認知能力を獲得し、自らの読みと他者の読みを相対的に見つめるとともに、教師から相対的に自立して学習を行っていくことを支援できるようになった。

一方、本研究における社会的行為としての読むことの学習の設定において、学習評価における対話とフィードバックの在り方をより具体的に検討していく必要があることを課題として示した。本研究では、社会的行為としての読むことの学習を、(1)教師と学習者との関係、学習者同士の関係における読みの相互作用、(2)その学習空間におけるテキストとの出会いの蓄積の中で生まれる学びの両輪によって駆動されるものとして設定している。このとき、これまでの対話とフィードバックがどのように(1)と(2)の両輪の駆動を支えてきたのかという観点から、対話とフィードバックの在り方を見直していく必要があるということである。

## 第2章 読むことの学習評価における対話とフィードバック

第2章では、学習評価論における対話とフィードバックに着目し、その在り方が学習評価論の変遷とともにどのように変化したのかを確かめながら、社会的な行為としての読むことの学習を支援する対話とフィードバックの在り方を検討した。

学習評価論の源流である到達度評価において、フィードバックは学習者が学習におけるつまずきから回復できるよう、教師から一方的に行われるものであった。そのようなフィードバックは行動主義の学習観から構成主義の学習観への変換とともに見直され、教師と学習者がともに学習者自身の学習状況を追究・解釈していく「学習のための評価」と、評価主体を教師から学習者へと拡張していくことを目指す「学習としての評価」の在り方が検討され、対話を核とした学習評価とフィードバックが論じられるようになった。読むことの学習においてもこのような対話を核とした学習評価とフィードバックが検討され、〈理解方略〉を使用する「行為」とその成果にたどり着くという「結果」とを架橋することで学習者の読むことの学習を見とりフィードバックすることや、学習者が〈自立的な読者〉として成長していくことを促すために学習者が教師による評価を絶対的なものとみなすことのないようなフィードバックが提案された。

しかし、読むことの学習における対話を核とした学習評価とフィードバックは、これまで(1)教師と学習者との関係、学習者同士の関係における読みの相互作用、(2)その学習空間におけるテキストとの出会いの蓄積の中で生まれる学びを重視しつつも、結局は個人を単位に学習状況を追究・解釈していく評価であったことを課題として示した。この点に着目し、学習における学習者同士の関係に言及する「関係に基づく評価」や「文学の対話的論証」などの研究はあるものの、それらの要点を学習指導と評価の関係を含めたダイナミックな評価のプロセスに組み込んでいくには至っていない。そこで、共同体の形成を目指すという方向性を持たせることで、共同体を単位とした評価としてその指導と評価のプロセスを検討できる可能性に言及し、実践共同体を単位とした評価について検討することを提案した。

## 第3章 読むことの学習における実践共同体を単位とした評価

第3章では、実践共同体を単位とした評価について先行研究を整理し、読むことの学習における実践共同体の実態、構成要素、評価方法について考察することで、学習評価の枠組みを構築した。

まず、ウェンガーらが社会組織マネジメントの観点から示した実践共同体を構成する3要素について、教育の営みに置き換えて定義を示した。教育における実践共同体は、学習の目的や価値の共通理解〈ドメイン〉、教師と学習者や学習者同士の間に生成される関係性〈コミュニティ〉、学習を通して実践共同体で共有される知識〈プラクティス〉の3要素が互いに結びつきながら発展していくことで形成される。学習者のパフォーマンスは、それ自身が物語的性格を持って学びを可視化する評価機能を持つ。実践共同体を単位とした評価を行うことによって、このパフォーマンスの持つ評価機能とその効果が明らかとなり、指導と評

価のサイクルの中で実践共同体が形成されていく様子を捉えられる。

次に、読むことの学習でこの評価を行う際の課題を2つ明らかにした。1つは、読むことの学習の社会文化的側面を、社会と読むこととの関係の中で具体化する必要があることである。もう1つは、読むことの学習の社会文化的側面の発達と個々の学習者の能力形成的側面との関連を評価に組み込むことである。そして大村はまの「読書会」実践を事例にこの課題を検討することを通して、読むことの学習における実践共同体の実態、構成要素、評価方法を明らかにした。

大村の「読書会」実践では、読書の楽しさや深まりを味わえる読書会という言語活動を通して、学習者が自らの読書生活を社会へと開いていくことの必要感を実感し、〈ドメイン〉を共有していく。このとき読書会の充実は、実践共同体における「読み方」の集積としての〈プラクティス〉に支えられている。また、台本ふう手引きという指導上の工夫によって、読書会への学習者の積極的な参加が促され、ともに読みを生産する仲間としての意識を深め〈コミュニティ〉が作られる。また、台本ふう手引きによる読書会は、自らの読みを社会へと開いていく学習者の姿を、読書会に参加する学習者の学びの物語として可視化する。可視化を踏まえた大村のフィードバックは、実践共同体に対して次の読書会へと向かう目的や価値としての〈ドメイン〉を学習者に共有させる。この大村の「読書会」実践の実態と評価方法を踏まえ、実践共同体の構成要素を示した。実践共同体の構成要素が読むことの学習指導を通して発展することを見据えて、物語的性格を持って可視化される学習者の読む行為の社会的側面を価値づけフィードバックすることが、読むことの学習における実践共同体を単位とした評価であると考えた。

#### 第4章 読むことの学習における実践共同体を単位とした評価の実際

第4章では、読むことの学習実践の分析を通して、実践共同体を単位とした評価の実際について考察を行い、4つの提言をした。

分析の対象は、広島県内の中高一貫校において教員・森本（仮名）と中学生・高校生の学習者が自主的に集まり評論文を中心に読み合う、通称「土曜放課後の会」である。この会に参加する学習者にアンケート調査およびインタビュー調査を行い、分析を通して「土曜放課後の会」における実践共同体の実態を明らかにした。そしてその実践共同体の形成に向けた学習評価の方法を明らかにするために、①実践を通して学習者の読む行為がどのような物語的性格を持って可視化されたのか、②その可視化を受けて、教師は学習者の学習状況をどのように追究・解釈し、どのようなフィードバックを行ったのか、③教師によるフィードバックによって、学習者にどのような読みの広がり・深まりの可能性をもたらしたのかという3つの観点から実際の会の様子を分析した。

分析を通して、読むことの学習における実践共同体を単位とした評価への提言を4つ示した。1つ目は、読むことの学習において実践共同体を単位とした評価を行うことが、一人ひとりの学習者の読みの広がり・深まりを促すために必要であるということである。読むこ



との学習において実践共同体を単位とした評価を行うことで、学習集団としての学びの蓄積と一人ひとりの学習者の読みが「実践共同体の学習状況」として有機的に関連づけられ、学習者は「今、この集団で読んでいるということにどういう意味があるのか」という観点から学習を受け止めることができる。

2つ目は、そのような実践共同体の形成と読み手の育成を支える評価の方法として、学習という「実の場」において物語的性格を持って可視化される学習者の読む行為について、個々人の行為としてフィードバックするのではなく、実践共同体全体の行為としてフィードバックすることが重要になることである。

3つ目は、そのような実践共同体の形成と読み手の育成を支える評価が機能するためには、評価と同時に学習指導の方法も工夫していくことが求められるということである。学習者主体の協働学習を成立させる学習指導によって実践共同体の3つの構成要素は発展し、学習評価において教師はその発展を価値づけフィードバックし、そのフィードバックを受けて学習者は自身の学習状況を実践共同体との関係において追究・解釈し、その次の学習に向かうことができる。この指導と評価のサイクルの成立が、読むことの学習における実践共同体を単位とした評価のプロセスなのである。

4つ目は、この評価を通して育成される他者との関わりの中で読みを広げ深める自立的な読み手について、そのような読み手は「読み方」や議論の仕方を知識として持ち駆動させることができるだけでなく、他者と読みを広げる上で重要な情意を持ち合わせていると考えられることである。実践共同体の形成を通して学習者がともに読みを生産する仲間同士としての意識を深めることは、異なる読みを行う相手を尊重する「包容力」や辛抱強く話し合う「忍耐力」を身に付けることにつながる。

また、実践共同体が実践共同体の外部とどのように関わりを持っているのかということについて考察した。実践共同体とその外部との関わりにおいて重要なのは、外部の人々を実践共同体に引き込み、充実した読むことの学習の体験を重ね、外部での学習に「物足りなさ」を感じる人を増やすことである。そのような人が増えることで、充実した読むことの体験についての関心や問題、熱意を共有し、学校全体で読むことの学習に十全的に参加していく機運が高まるのである。

## 終章 研究の総括と展望

終章では、ここまでの検討を踏まえて序章で示した4つのリサーチ・クエスチョンに答え研究の成果とするとともに、今後の研究の展望を示した。リサーチ・クエスチョンの答えは以下に示すとおりである。

### ①読むことの学習において実践共同体を単位とした評価を行う意義は何か。

個人を単位とした評価では捉えきれない社会文化的な学習の側面の発展を指導と評価のサイクルにおいて捉え、支援できることにある。このような支援によって、社会的行為とし

での読むことの学習について、個人的な営みとして捉えるのではなく、教師と学習者との関係、学習者同士の関係における読みの相互作用に加え、その学習空間におけるテキストとの出会いの蓄積の中で生まれる学びとして捉えていくことができる。教師が学習者の学習をこのように捉えてフィードバックすることで、学習集団としての学びの蓄積と一人ひとりの学習者の読みが「実践共同体の学習状況」として有機的に関連づけられ、学習者は「今、この集団で読んでいるということにどういう意味があるのか」という観点から学習を受け止め、自身の学習状況を追究・解釈していくことができる。

## ②読むことの学習における実践共同体の実態と構成要素は何か。

読むことの学習における実践共同体の構成要素は、次の表1のように示すことができる。

**表1 読むことの学習における実践共同体の構成要素**

ドメイン	言語活動を通して、学習者自らの読書生活を社会へと開いていくことの必要感を実感する
コミュニティ	学習者同士の関係：言語活動への積極的な参加の中で、ともに読みを生産する仲間同士としての意識を持つ 学習者と教師の関係：学習者の言語活動への積極的な参加を教師が支援する
プラクティス	個々の学習者の知識・技能的な能力を発揮できる「実の場」としての言語活動を通して、「読み方」が共同体で集積される

読むことの学習における実践共同体の実態は、実践共同体によってさまざまであると考えられるが、〈ドメイン〉〈コミュニティ〉の要素があることで、積極的に自身の読みと他者の読みを交流させ相手を尊重しながら吟味する協働学習が成立していると考えられる。

## ③読むことの学習における実践共同体を単位とした評価の方法として、教師と学習者は学習者の学習状況をどのように追究・解釈できるのか。

教師のフィードバックの要点は、「実の場」を通して可視化される物語的性格を持った学習者の読む行為について、個々人の行為としてではなく実践共同体全体の行為としてフィードバックすることである。また、このフィードバックを機能させるための学習指導において大切なのは、学習者主体の協働学習を成立させることである。そのような学習指導によって実践共同体が形成され、その形成の評価を踏まえ、学習者は次の学習に向かう。この指導と評価のサイクルの成立が、読むことの学習における実践共同体を単位とした評価のプロセスである。

**④そのような評価の方法が、学習者の読みや読む行為にどのような広がり・深まりをもたらすのか。**

学習を個人的な営みではなく実践共同体として捉え評価することで、実践共同体の 3 つの構成要素が発展し、実践共同体が形成される。そのような実践共同体において、学習者は学習者主体の協働学習で相手を尊重しながら自身と他者の読みを吟味する体験を重ねる。その体験を通して、学習者は複数の読みを相対化しながら実践共同体全体で読みを広げたり深めたりできる。それは、個人の読書生活では決して得られない広がり・深まりである。

自らの読みと他者の読みを吟味し複数の読みを相対化することは、そのための技能を持ち合わせる優れた学習者が一人でもいれば成立するというものではない。その場の全員が自身と他者の読みを吟味する必要感を実感し楽しむことのできる実践共同体の形成を価値づける評価を行っていくことが、一人ひとりの学習者の読みや読む行為に個人では得られない広がり・深まりをもたらす。

この 4 つの研究・クエスチョンの答えは、読むことの学習における実践共同体を単位とした評価の意義を示し、その方法の要点を学習指導と評価の関係を含めたダイナミックな評価のプロセスに組み込み提案するものとなっている。これが本研究の成果である。

この成果を踏まえ、残された課題を 2 点示した。1 つは読むことの学習における実践共同体の形成段階を示すこと、もう 1 つは実践共同体での教師の役割を学習者に移行させる手立てを探ることである。